伊予奈良原山頂経塚金銅製宝塔梵字の研究

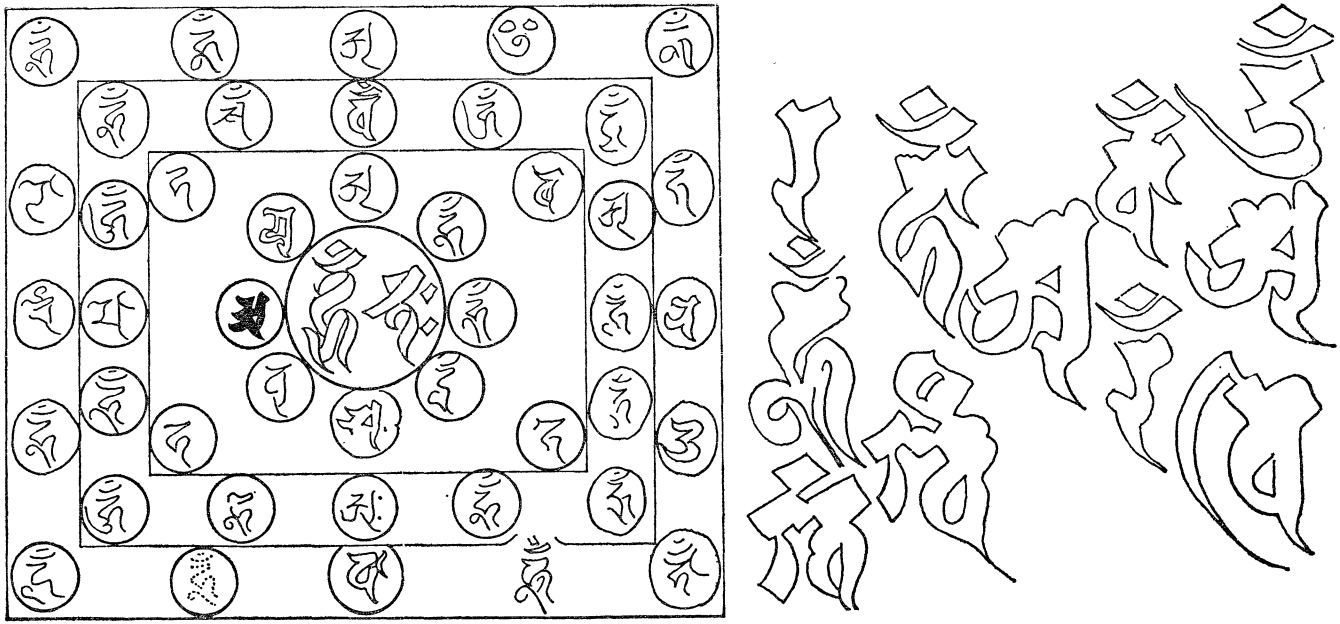
齋　藤　彦　松

一、序　愛媛県松山市と今治市を直線で結んだほぼ中央に位置する標高千四十米の檜原山頂の奈良原神社で昭和九年八月二十六日雨乞行事の為め境内大掃除の際発見された経塚の主要をを為す金銅製宝塔々身の外周に書刻された梵字の形式と内容の解明が本研究の目的である。

二、基礎事項　1出土地　愛媛県越智郡玉川町檜原山頂奈良原神社境内　2現在地　玉川町鈍川字吉ヶ谷鈍川温泉郷内国宝収蔵庫　3管理者　玉川町　4出土宝塔の製作年代推定藤原期十二世紀後半　5国宝指定　考第二十一号昭和三十一年六月二十八日　6筆者の現物調査　昭和五十年六月七日　7参考資料　本学会発表時の Saito Print No. 44 の要記二紙に諸表図等あり。

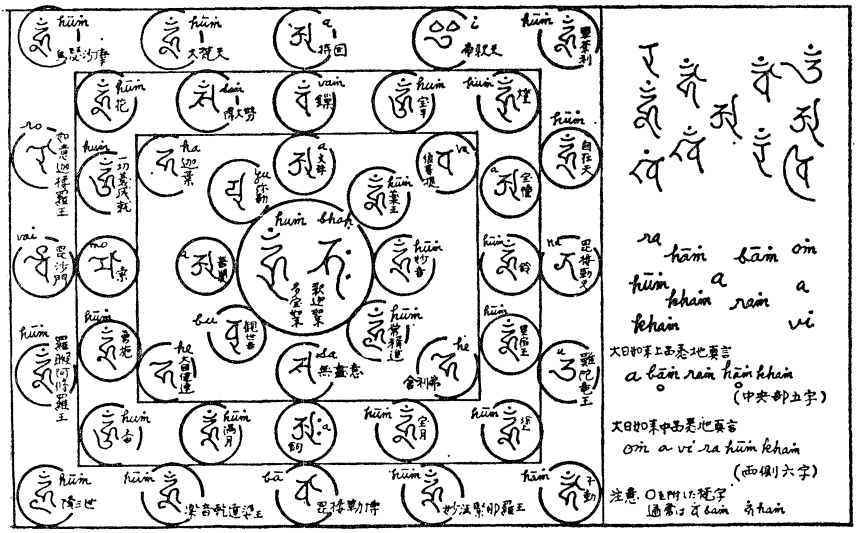
三、梵字形式　この宝塔には梵字以外の文字は認められない。その梵字の書体に就いて、今迄の研究報告書類では「ランツア体」であるとか或は「梵字の体をなして居らぬ」等の記載が多くあるが、この梵字書体は悉曇 Siddhaṁ と呼ばれる文字で古来より日本では「シッタン」と称したもので、宝塔では当時彫刻し難い金属に刃物を当てての物故下書きの墨書の様には行かず、苦辛の跡が書体の誤解を招いた原因と推定される。日本で梵字と申せばこの悉曇文字を指すものと解され、日本全土にこれを見ぬ所はない程に行き渡つた文字である。更に区分すれば正面曼荼羅の文字は中央二字を除く他の全字は毛筆書き文字で、その外周を袋彫りした文字と、中央を線刻単線文字とになる。曼荼羅中央二字と背面の大日真言十一字計十三字は刷毛書き体の文字で朴筆体とも呼ばれ、各文字の外周を線刻している（第一図第二図参照）

四、梵字群の内容と問題点　塔身外周梵字は二グループに区分され、正面の方線及月輪内の梵字は法華曼荼羅で全四十六字を以つて形成されている。背面の大梵字十一字は中央五字が a baṁ raṁ hāṁ Khaṁ 大日上品悉地、その外六字は oṁ a vi ra huṁ khaṁ 大日中品悉地の両真言である。この梵字群と言ふよりは、この塔の問題点は、曼荼羅中央二



第一図　奈良原山経塚出土　宝塔梵字図（左方は塔表面法華法曼荼羅，右方は（塔後面）大日上，中品真言）

註　1. 本図は文字の欠画，月輪の歪み，文字線の切れなどなるべく現存のままを写さんとしたものである。
2. 本図梵字を解り易く書き改めたのが第二図で発音，種字内容も説明加筆した。
3. 左下段より2番目の月輪内梵字は不明瞭なるも **hūṁ** 字と推定した。中央の **huṁ** 字に注意。
4. 小梵字は毛筆書きし，その字の外周又は中央を線刻したもので，未刻文字も混在している。
5. 右方の大梵字群（11字）は左方の曼荼羅小字群に比し優れて居り，平安期の悉曇文字として貴重な学術資料で，書体筆勢共に並々ならぬものがあり，平安期朴筆体として数少くない遺品である。11字中の中央部の5字は大日如来上品悉地真言で **a**（中央）**vāṁ**（右上）**raṁ**（右下）**hāṁ**（左上）**khaṁ**（左下）となつて居るが，通常は **a vaṁ raṁ haṁ khaṁ** でその相違点は研究を要する。残りの両側6字は，右方3字より左方3字で大日如来中品悉地真言 **oṁ a vi ra kūṁ khaṁ** でこの後，鎌倉期，室町期，江戸期，と現在にも信仰されている真言である。



第二図　宝塔梵字（第一図）の説明図　中央の多宝如来種字に注意。

字の向つて左方の吽 hum 字にある。この文字が何仏の種子として表現されたものかが不明の為め、この曼荼羅を法華のそれと決定する事が出来なかつた。日本での法華法曼荼羅遺品中釈迦如来の種子の bhaḥ と並んで a 又は aḥ の文字がその殆んどである。これ等は何れも多宝如来の種子とされ、多宝、釈迦の並座となるのであるが、多宝如来の種子を hum とする例は今迄に知られて居らず、従つて中尊の種子が不明のところから曼荼羅名を決定し兼て、現在に及んでいた。筆者も現物調査に及んで始めて釈迦と並座する梵字が hum である事を知つて驚いた。早速筆者の曼荼羅整理ノートを子細に見討したところ、只一つ同位置に吽 hum を持ち更にそれに多宝如来と傍書した法華法曼荼羅の存在が判明した。それは京都醍醐寺蔵「四家鈔図像」中の三種法華法曼荼羅中の一種であつて、本宝塔の曼荼羅と構成文字の殆んどが一致して居る事も見のがせない。この事から本宝塔曼荼羅中央の吽 hum 字は多宝如来種子と推定される。更にその全容も法華法曼荼羅と決定する事が出来る。是等の事から京都と伊予と両者関係は本宝塔を含む経塚の成立に重要性を示めして来る。四家鈔図像が鎌倉初期の物と推定される事からそ以前の平安期に期にこの種（多宝仏に吽字）の法華曼荼羅が成立して居り、その後四家鈔図像はそれ等の多くを集録し今日に伝えたものと推定される。右図像の集録前、平安末期頃にこの種特殊曼荼

羅が伊予国にも伝えられた事を、この宝塔の曼荼羅は示めして居り、文化伝播を語る具体遺品としてその重要性が推定される。

五、信仰思想　この法華曼荼羅の主尊である多宝如来の種子に吽字が用いられた事の背景、即ち、その信仰思想には、日本密教の特色でもある「両部不二大日信仰」と「法華密教思想」が推定される。両部不二思想は印度以来と推定され蘇悉地羯囉経などはその故に台密に重要視され、中国でも海雲の両部大法相承師資付法記唐大和八年 A. D. 834 などがあり、両部不二思想の研学がなされたが、両部不二大日信仰に迄たかむるに到つたのは日本密教を俟たねばならなかつた如くで、日本には多くの両部不二大日の信仰遺物が現存する。その信仰と法華密教が習合したところの信仰遺物として、この宝塔梵字の内容をみる事が出来る。

六、宝塔との関連遺物　本塔内及同出土の銅経筒三口内には紙本経が奉納されていたが朽ち果て、その内容は知る由もないが軸端金具等が残つている。その他の関連品目、経筒用外套用甕三口・銅鏡・鍔口・銅鈴・鉄鈴・宋窯青白磁盒子・金銅笄（片方耳掻）・檜扇・椀形土器・刀子・ガラス玉・銅銭（唐開元通宝 AD-621～江戸寛永通宝 AD-1622 計百数十枚）・石造宝塔（建徳二辛亥十二月日、願主浄幹、大工藤原宅人の刻銘あり AD-1371）、以上が宝塔と共に貴重な遺物である。了。

新刊紹介

泰本　融著

「東洋論理の構造――ニヤーヤ学説の研究」

A5判・本文三三五頁・定価四八〇〇円
法政大学出版局・昭和五十一年三月三十日刊

小川弘貫著

「中国如来蔵思想研究」

A5判・本文四八八頁・定価七八〇〇円
中山書房・昭和五十一年十一月十八日刊

恵谷隆戒著

「浄土教の新研究」

A5判・本文五一六頁・定価一一〇〇〇円
山喜房仏書林・昭和五十一年十一月二十日刊

幡谷　明著

「親鸞教学の思想史的研究」

A5判・本文四九五頁・定価八〇〇〇円
文栄堂・昭和五十一年十二月二十日刊